

よく働き学ぶ子どもたち

タイとビルマの国境の山岳地帯には少数民族のカレン族が住んでいる。軍部が支配するビルマでは、国民や辺境の諸民族が抵抗運動を続けており、国内の紛争は五〇年以上も続いている。カレン族の人たちも独立と民族自決を求めて武装闘争を続けている。7年間、毎年カレン族のキャンプを訪ね、彼らの暮らしを撮影してきたフォトジャーナリストの宇田有三さんが報告してくれた。

難民キャンプの朝は早い。世が明ける前から男はたきぎを切り、竹を組んで家を作る。子供や女性は川で水をくみ、大きな容器を頭に載せて運ぶ。

明るくなるころ、あちこちの家から子供たちの元気な声が聞こえてくる。前日に学校で勉強したところを暗唱しているのだ。

授業は朝8時50分から午後3時まで。小学校からビルマ語、カレン語、英語が必修だ。英語教育には特に力を入れていて、どの学校でも、流ちょうに英語を話す中学生や高校生がいる。

学校が終わると、子供たちは幼い弟や妹の面倒を見たり、豚や鶏の世話をしたり、よく働く。そんな暮らしの中の楽

しみは「友だちとおしゃべりしていると
き」と17歳の女の子は言う。みんな
遊ぶこともある。

電気がないから、日が落ちるとキャン
プは暗くなる。あちこちの家から聞こえ
てきた子供たちの声も、午後9時前には
聞こえなくなり、キャンプは眠りにつく。

写真キャンプション

・輪になって、みんなで追いかけてこ。

・カレン民族解放軍(KNLA)は軍事
政権と戦っている。どの前線でも子供た
ちの姿を見る。戦闘に参加しているのか、
それとも弾薬や食料を運んでいるのか。
・・・